

教育方法学

ひだまり小学校

教育学部 教育学科 2 回生

B1 0301-0384 小林真代

—目次—

第1章：チームで構想した学校

○ひだまり小学校について

- ・ 目標
- ・ 特色①～⑥

第2章：学力を育成するための取り組み —算数—

○学力の現状

○学力を高めるために、どのような取り組みが行われているか

- ・ 山口大学教育学部附属山口小学校の例
- ・ 佐渡市立金井小学校の例
- ・ 荒川区立第九峡田小学校の例

○自分ならどのように取り組むか

- ・ 体験的な学習
- ・ ティームティーチング
- ・ 教材の工夫
- ・ 場の工夫
- ・ 気をつけること

第3章：チーム学習と学習成果の評価について

- ・ ポートフォリオ
- ・ 到達度評価
- ・ ポートフォリオの評価と到達度評価の活用

第4章：講義の感想と希望

●参考・引用文献、参考・引用 URL

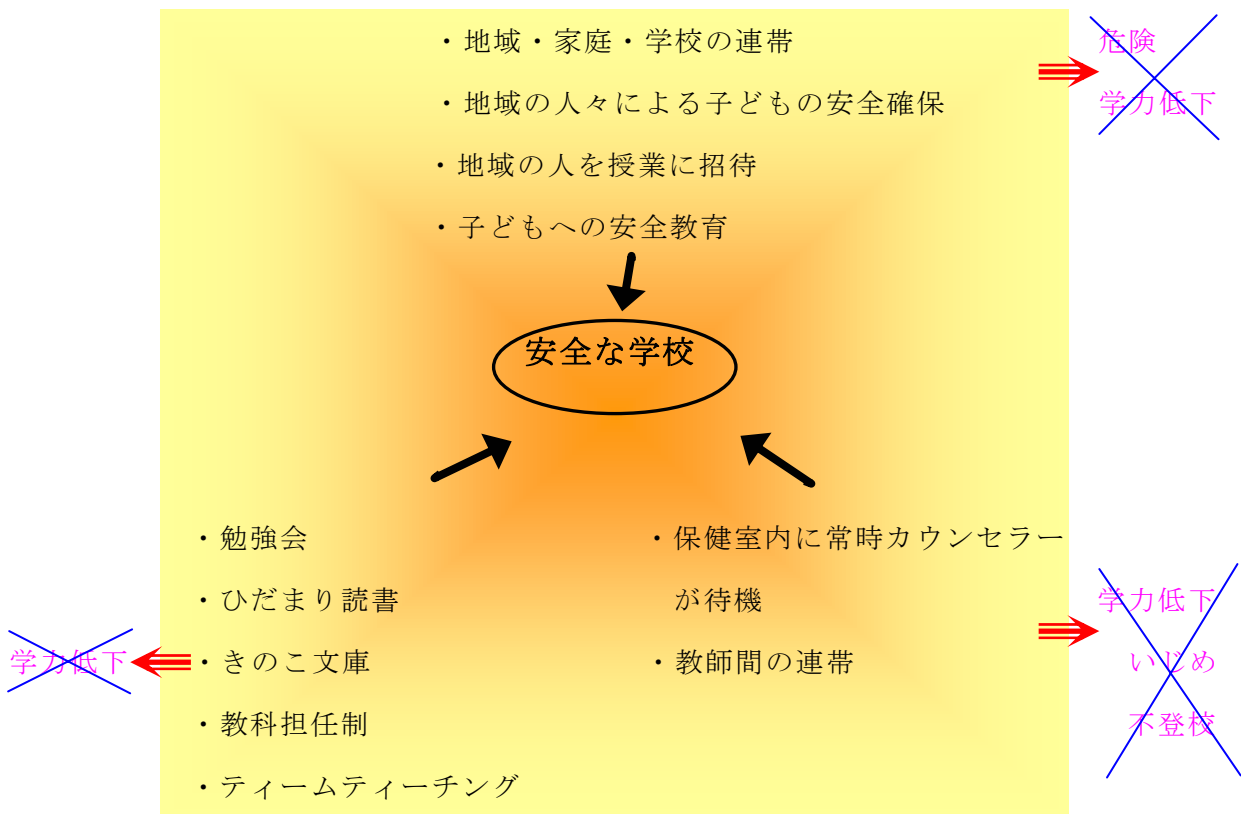
* 自己評価表・公開同意書

第1章 チームで構想した学校

ひだまり小学校について

今どのような問題があるかについてチームで話し合った結果、犯罪に対する防犯対策・学力低下・学級崩壊・いじめ・不登校などが出てきた。私たちは、この中の防犯・いじめ・学力低下・不登校に注目して理想の小学校を考えた。名前は「ひだまり小学校」である。地域のつながりを強くしていくために、私立ではなく公立の小学校とする。名前には、小学校が保護者や教師だけでなく、地域の人にも見守られ、常に日が当たっている、ひだまりのようにあたたかい場所であるようにという意味がある。

<目標>



この小学校では、**安全な学校**を目標の中心において、**危険・学力低下・不登校・いじめのない学校**を目指している。ひだまりという名前に現れているように、学校は地域の人たちに見守られ、学校の中だけではなく、地域や家庭と協力し共に教育するという考えをもっている。地域でのいろいろな取り組みにより、地域の方とのふれあいを通じて安全で健康に、そして児童が安心して学習できる学校を創っていこうと考えている。

<特色①>

ひだまり小学校では、たくさんの人とコミュニケーションし友達が増えるようにと、一クラス 30 人で一学年 4 から 5 クラスと決めている。少人数指導のために、担任教師以外に一学年に主任を 2 人おき、学校全体には芸術教科専門教師として、書道・音楽・図画工作に各 2 人をおく。

<特色②>

登下校時の安全として、児童に交通安全や防犯などの安全教育を行い、地域の方の協力によるパトロールも行う。地域の方には特別ゲストとして授業にも先生として学校に来ていただく。また児童も生活科や総合的な学習の時間のフィールドワークをして地域の商店街や公園に行く。そうすることで児童と地域の人が顔見知りになり、日ごろから地域内で子どもたちの安全を意識してもらえそうな関係を作ることができる。この取り組みにより、授業で本物にふれることで、学習する意欲を引き出そうと考えている。

<特色③>

学力については、国語を中心とし言語能力を伸ばすことに力を入れている。そのために、ひだまり読書、きのこ文庫を設けている。

ひだまり読書

いつもとは違った環境で自由に読書を楽しめるよう屋外の木陰に本棚を設置し、そこに本を置いたものである。

きのこ文庫

空き教室などにきのこの形をした本棚を設置し、読書のスペースを作って気軽に本を読むことができるようにしたものである。個人で本を楽しむだけの場ではなく、聞いた言葉から想像を膨らますことができるよう、教師による本の読み聞かせも行う。

<特色④>

勉強会

週に一回、放課後に勉強会を行う。放課後は、塾に行く人や習い事をしている人もいるので、この勉強会は子どもの自主性に任せたもので、強制ではない。この時間に宿題をしてもいいし、準備されたプリントをしてもいいし、やる内容は個人で決めて行う。

< 特色⑤ >

芸術教科の教科担任制

書道・音楽・図画工作を学校全体に各2人ずついる専門教師が担当し、児童の疑問や要求にきちんと応えられるようにしている。それぞれの分野に詳しい先生に学ぶことで、興味を持つことができるように工夫していく。

< 特色⑥ >

保健室内にカウンセリング室を設置

保健室に養護教諭のほか、専門のカウンセラーが常時いるようにしている。なぜ特別にカウンセリング室を設けないかという点、カウンセリング室が独立してあると、周りの目が気になり相談に来にくくなると思ったからである。また、体の問題と心の問題とを自分で区別することは困難であると思ったからである。社会や家庭環境が複雑化している中で、児童が持っている悩みを打ち明け、少しでも楽しんで生活できることを望んでいる。また、家庭との連絡をとり、地域・家庭・学校が協力して子育てができるよう、定期的に家庭との話し合いの場を持つようにしている。これにより、家庭での児童の様子と学校での児童の様の両方を知り、児童との接し方を考え、児童の変化やサインを読み取れるようにする。また、保健室登校も出席とし、少しでも学校にこられるようにしている。

第2章 学力を育成するための取り組み

— 算数 —

私は、小学校の算数において、一人一人の学力を高めるためについて考えた。

	1989年			2001年		
	通塾	非通塾	差	通塾	非通塾	差
数と計算（概念）	85.1	80.0	-5.1	75.9	74.4	-1.5
数と計算（計算）	89.5	84.5	-5.0	81.0	76.5	-4.5
量と測定	77.6	69.3	-8.3	58.4	55.5	-2.9
図形	82.5	77.8	-4.7	68.5	64.3	-4.2
数量関係	85.3	79.5	-5.8	65.4	62.0	-3.4

（岩波ブックレット No. 578 『「学力低下」の実態』 P25 表 I-7）

学習指導要領は、「自ら学び、自ら考える、生きる力」を育て、学ぶ意欲や応用できる力をつけることを目標としている。最近、ゆとり教育が学力の低下につながっているのではないかという考えから、系統的な学習に考えが戻りつつある。そして、計算ドリルなどの繰り返し学習が行われる傾向がみられる。しかし上のグラフから読み取れるように、実際の算数の学力は、計算だけではなく、より広い領域で基礎学力は低下している。領域によって、概念は理解しているが計算ができていなかったり、計算はできているが概念は理解していなかったりする。

○ 学力を高めるためにどのような取り組みが行われているか

実際にどのような取り組みが行われているか、いくつかの例を挙げる。

<山口大学教育学部付属山口小学校の例>

5年生の量と測定の領域で、自分たちで公式を作り、面積を求められるようにするという取り組みがある。

○ 同じ面積の図形を作ろう

- ・ 面積が同じで違う図形を作ってみよう。長方形や平行四辺形や三角形や台形ができたよ。長方形の面積は公式で求められるね。今からいろいろな図形の公式を作っていこう。

○ 平行四辺形の面積を求める公式を作ってみよう。

- ・ 式を言葉の式に変えていくと、みんな同じ形になったよ。公式を使って平行四辺形の面積を求めてみよう。

○ 三角形の面積を求める公式を作ろう。

- ・ 今度は長方形や平行四辺形に形を変えるといいんだな。「底辺」と「高さ」で言葉の式を作ろう。今度も同じような式になってきたよ。作った公式を使って、三角形の面積を求めてみよう。

○ 台形の面積を求める公式を作ろう。

- ・ 台形の公式ってあるのかな。挑戦してみよう。台形的时候は「上底」「下底」という言葉を使うんだね。言葉の式にしてみよう。台形も同じ式になりそうぞ。公式の作り方が分かってきたよ。

○ 普通の四角形の面積を求めよう。普通の四角形の面積はどうやって求めたらいいのかな。どんな図形でも三角形に分けることができたね。三角形の面積を求める公式を使えばいいね。

○面積を求める式から図形を考えよう。

- ・ この式で求めることができる図形ってどんな図形だろう。ああそうか、長方形をくっつけたような形だな。みんなで、図形を作ったり、面積を求める式を求めたりして、いろいろ問題を出し合おう。

○身の回りの面積を求めよう。

- ・身の回りのものの面積を求めてみよう。1mのものさしと巻尺で測定して求めてみよう。丸い形はどうしようかな。大体の形を考えて、およその面積で求めてみよう。

<佐渡市立金井小学校の例>

○課題

- ・ 筋道を立てて考え、表現する能力を育てる必要がある。
- ・ 基礎的な知識と技能を身につけさせる必要がある。

○実践の計画

1. 指導の方策

- ・既習事項と関連付けて発表したり、質問したりできるように話し方・聞き方を指導する。
- ・知識や技能に関して、児童の実態を把握し、個人差に配慮した個別指導を継続する。
- ・学習内容の系統性や児童の実態をもとに、指導法の工夫に努める。

2. 実施事項

- ・学習態度や内容理解の評価を行うために、算数チェックカードを利用する。
- ・児童の実態把握のために、全校計算テスト等を定期的実施する。
- ・個別指導の充実のために、各学期末に習熟度別学習の時間を設ける。
- ・楽しく充実した学習活動となるために、作業的・体験的な活動等を取り入れる。

(教材・教具の活用、パソコンの活用、学年での TT 指導等)

<荒川区立第九峡田小学校の例>

1. 算数の数学的な考え方、知識・理解及び数量関係に課題があります。

↓

数学的な考え方を高めるには、文章を読んで理解する力を身につけることが基本であると考えます。具体物や半具体物を使用して指導することはもちろん大切ですが、高学年では、まず問題文をしっかりと読み取ることができるように、「何を求めているのか」の部分に下線を引く等の具体的な作業を入れるなどの指導を通して、文章を読み取る力を高めています。

2. 算数の習熟度別学習の充実に努めます。特に、「のびる喜び」を味わえる児童の育成に努めます。



学級数+1の学習展開で指導することを基本とします。

上の3校の例を見て、どれも受身の授業ではなく、児童の主体的な活動を促すものや体験を取り入れた学習であることがわかる。

○自分ならどのように取り組むか

私は、算数の学力は数字や単位から実際の量や大きさを読み取ることのできる力であると考え。小学校の算数では、自分で体験して量や大きさを実感できる学習を考える。

<体験的な学習>

方法として、先に公式を教えず、どのようにしたら欲しい答えが求められるのかを考えるようにする。例えば、面積であれば方眼紙などを使い、どうしたら面積は求められるのかを考える。そして一人ひとりに紙を配り、面積を導き出す式を自分で思いついただけ書き出せるようにする。これは自分で公式を作るという活動になる。また、子どもの実態に合わせて、先に公式を教えるという方法も考えられる。理屈を理解できないのに無理に考えさせることは学習意欲の低下にもつながる。公式を利用して繰り返し練習し、慣れたころに“どうして”縦×横で面積が求まるのかということを一一人ひとりに考えさせ、考えつくものを何でも紙に書いていくようにする。これらは両方とも、自分自身で考えて解決しようとする姿勢につながっていく。

しかし、体験的な学習には欠点もある。学習するものには体験として学ぶのが難しいものがある。また体験を重視するあまり、読解力などが育たない可能性がある。こういった欠点を補い、よい面を活用できるよう、体験のみではなくほかの方法も組み合わせて学んでいく必要がある。

<ティームティーチング>

児童が授業の内容を理解できているか教師は常に気にかけておく必要がある。教師が黒板の前に立っていたままでは、児童の手元の様子はよく見えないので、作業が進んでいるのか、理解してやっているのか分かりづらい。教師は、なるべく児童の近くにいて様子を知る必要があるが一人ではなかなかみんな一人ひとりを見ることはできない。ティーム

ティーチングでは、担任教師ひとりで授業するよりも一人ひとりの子どもに目が届きやすい。そして授業中の個人の質問にも答えやすくなる。また、全体のスピードについていけなくても、個人の進度に合わせて進めることが可能になる。

<教材の工夫>

教師が黒板やプリントに図を描くときは、実際の大きさを描くようにしたり、個別学習ができるようなプリントを準備し、全体ではなく個人で学習を進めたりできるように工夫する。特に、面積や重さの単元では量というものを文字で自分の中に取り入れ、それを頭の中で認識するのは難しいと思う。そこで自分たちの身の回りにあるノートや消しゴム、黒板、ドッジボールのコートなどを教材にし、実際に広さや重さを測定し、自分で体験して理解を深めていけるようにする。ときには、算数だけにとらわれず、他の教科とも融合させた授業展開を行なうように工夫する。例えば、面積を求める授業であれば、社会と合わせて地図を読み取ったり、実際に地図で自分たちの町の面積を測ったりする。

<場の工夫>

大きな単位を取り扱う単元では、教室の中だけの授業ではなく、体育館や運動場に出て実際どのくらいの広さなのか、どのくらいの長さなのかを体験できるようにする。実際に体験することで、大きな単位も予想もつかないものではなく、自分の生活の中でも活用しているものであるということが分かる。

○ 気をつけること

どういった順に学習を進めるのか、教師はいつどのような問いを発するのかをしっかりと準備しておく必要がある。『教育と方法と技術』の72、73ページに「個人課題の設定に先駆けて共通体験をさせるのか、それとも最初から自由に個人課題を設定させるのか、子どもの発達段階やカリキュラム構成を考慮しながら慎重に決定する必要がある」「体験をさせる場合には、その内容をどうするかについて、授業設計では最も多くの時間を使うとともに、教師間の共通理解を得ることが大切である」と記されている。体験的な学習をするとき、それまでの子どもたち一人一人の生活体験の違いを考慮しておかないと、同じ学習をしても共通の理解を得る事ができなくなってしまう。そのためにも、体験学習のための事前準備を徹底しておかなければならない。

第3章 チーム学習と学習成果の評価について

—①学習者の学習成果をどのように評価するか—

評価について、私は一人一人のポートフォリオを作り、学習の過程を残していった個人で到達度にあわせて評価できるようにしたい。

<ポートフォリオ>

ポートフォリオとは「子どもの作品、自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などを意図的・系統的に蓄積していくファイルなどを指す。ポートフォリオ評価法とは、ポートフォリオづくりを通して子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習活動と自らの教育活動を評価するアプローチである。」(ミネルヴァ書房『教育の方法と技術』西之園晴夫・宮寺晃夫 編著 P179) というものである。ポートフォリオは個人のオリジナルのものであって他人と比べられることはなく、次の課題を見つけることにも役立つのでこれを取り入れる。ポートフォリオには、予め入れるべき作品と評価基準が決まっているもの、教師と子どもが交渉しあいながら評価基準を決めていくもの、子どもが自分で評価基準を作り自己アピールするものと三つの種類があり、教科に合わせて違った方法でポートフォリオをつくっていく必要がある。算数では、予め入れるべき作品と評価基準が決まっているポートフォリオをつくる。

・注意点

しかし、どのポートフォリオを作るのにも効果的に利用するには注意しなければならない点がある。一つ目は、教師がポートフォリオで子どもの学習実態を具体的に把握する必要がある。ポートフォリオには子どもの学習の過程が収められていくので、完成作品だけでなく作っている途中のメモや資料にも注意し、検討して評価する。二つ目は、ポートフォリオ作りを通して子どもにも自分自身の学習について考えさせるということである。作った作品やがんばったことを自分のものだけにしまわず、他の人に見せる機会をつくることで、自分の学習を見直すことができる。また、見せることで周りからの評価も聞くことができ、次の課題探しにつながる。三つ目は、教師と子どもがポートフォリオを見ながら定期的に話し合いをする機会を設けるということである。これは子どもの自己評価を引き出すために行われなければならない。

<到達度評価>

このポートフォリオによる評価に加えて、到達度別の評価も取り入れていきたい。

到達度評価とは、「到達目標を基準とし、それに到達しているかどうかで子どもたちを評価するもの」（ミネルヴァ書房『教育の方法と技術』西之園晴夫・宮寺晃夫 編著 P172）である。到達目標とは、・・・がわかる、・・・ができるというように、目標内容を到達点とするものである。・・・ができない、・・・が不十分であるという評価ではなく、どれだけのことができるようになったのかを評価でき、教師も子どもも日々の成長を見て感じられる。このとき、評価項目は予め設けているが、進む速さは一人一人に合わせるので、次の課題は個人で違ってくる。評価をするときは、数字や印ではなく言葉で評価するようにする。

<ポートフォリオの評価と到達度評価の活用>

この二つの方法を組み合わせることで、全体の中での個人の位置づけではなく、個人の学習成果も一人一人の視点から評価することができる。まずポートフォリオで子どもたちの学習の軌跡を記していく。体験的な学習を通して分かったこと、思ったことを記したり、実際にした作業を自分で振り返り記録したりしてどんどん貯めて行く。問題をといたプリント類も貯めて行く。そして、授業時間の終わりに、今日自分ができたことについての評価をし、互いに発表しあう。そこで、個人の評価が適当でなければアドバイスをする。この評価と同時に、明日の自分の目標や課題を見つけるようにする。そして次の日はその目標に向かったまた学習するのである。毎回の評価以外に、ポートフォリオを学期末など最後に見て、子どもたちがそれぞれどれだけ成長したのかを、教師と子どもとの両方が評価しあうこともする。成果を長期間で見ると成長が見やすくなる。個人のよい部分を評価していくことで長所を伸ばすこともでき、子どもも自分に自身が持てるようになる。

・ この評価の問題点

この評価は、個人の成長を示すことができるが、人によって進み具合にばらつきが出てしまう。また、時間を追うごとに一人一人の学習活動内容が違ってくるので、教師が対応しきれなくなってしまう。これらの問題について、自分で学習できるような本を作ったり、ティームティーチングなどを取り入れたり、一クラスの教師の数を増やしたりすることが考えられる。

第4章 講義の感想と希望

大学の講義は個人の活動が多く、チームでの活動は本当に少ない。そんな中、この講義

でチームを作り、チーム内での自分の担当を決めてそれぞれがみんなのために役目を果たしていく事はいい経験になった。ほぼ一人一役で、自分が役目を果たさないと代わりをする人がいないので、責任を感じたが、活動中は互いに協力し合って休みの人の分をカバーできたので安心した。

教育の問題について、そのまま議論するのではなく、理想の学校として教育が抱える問題に、どのように対処していくかを考えていくという方法で議論していったので、考えやすく意見を出しやすかった。理想の学校について意見を出していくと、取り入れたいものが多く出てきて、費用とのバランスが取れなくなってしまった。チームとしては、理想の学校のどの取り組みも削りたくはないものであったので、公立の小学校としては費用の面で実現が難しいものになってしまった。限られた条件の中で、どれだけよい教育をすることができるかを考えなければ、それは実現に近づかないと思った。

理想の学校について考えを進めていくのに、チームを変えず最後まで同じ人たちと話し合いができてよかったと思った。初めのうちは全員で集まって話し合いをするという方法を取っていたけれど、慣れてくると時間の合う人だけが集まり、他の人は掲示板やメールで連絡を取り合いながら作業を進めていくという方法に変わっていった。他のチームと互いに評価し、意見を交換し合えたことも良かった。これにより、自分たちだけでは気付くことの出来なかった理想の学校の欠点や、良い所、説明が不十分なところなどが分かり、話し合いの続きに生かすことができた。問題の解決策について考えるとき、自分たちでは良いと思って答えを出すので欠点に気付きにくい。そのため、問題は一人で解決しようとせず、他の人に相談したり他の人の意見を聞いたりすることが必要だと感じた。

希望としては、話し合いや作業中心の講義であったのに、机と椅子が固定されていて、みんなと顔をあわせての話し合いがやりづらかったので、机や椅子が自由に動かすことができる場所で講義を受けたかった。

—参考・引用文献—

『教育の方法と技術』西之園晴夫・宮寺晃夫 編著（ミネルヴァ書房）2004年

『「学力低下」の実態』荻谷剛彦・志水宏吉・清水睦美・諸田裕子（岩波ブックレット No. 578）

—参考・引用 URL—

山口大学教育学部附属山口小学校 <http://www.ymg-es.yamaguchi-u.ac.jp/>

佐渡市立金井小学校 <http://www.sado.co.jp/kanaiشو/>

荒川区立第九峡田小学校 <http://www.city.arakawa.tokyo.jp/DAI9HAKETA-E/gakuryoku/>

授業実践報告 算数 <http://www.bunkei.co.jp/jissen/sansu/kawamo.html>

紀伊国屋書店 <http://bookweb.kinokuniya.co.jp/htm/4337650113.html>

* 自己評価表

レポートが目指しているレベル・・・・・・（ B ）

このレポートでアピールしたいポイント

算数の学力向上について、今また系統学習への揺り戻しの傾向が見られるが、私は教材の工夫、場の工夫をし、体験的な学習を通して算数の力をつけいこうと考えた。対象が小学校であるので、算数においても体験的な学習は印象に残りやすく、学習の意欲をもちやすい方法であると考えた。

① 参考文献・引用文献・参照 URL を示す事が（ できた ）。

② 感想（「だと思ふ」調）ではなく、論理（「である」調）で主張（ できた ）。

③ 読み手が読みやすいように配慮する事が（ できた ）。

* レポート公開同意書

このレポートを後輩が受講する「教育方法学」で公開してもよいですか。また大学の web 上に公開が認められるとしたら web 上に公開してもよいですか。

後輩への公開について（ 1 ） web 上の公開について（ 1 ）

2005 年 1 月 19 日 氏名（ 小林真代 ）